

# 産婦人科領域における漢方療法



## 加藤 育民 先生

旭川医科大学 産婦人科

1992年 旭川医科大学 卒業  
 1992年 旭川医科大学 産婦人科 入局  
 2003年 アメリカ国立衛生研究所(～2006年)  
 2006年 旭川医科大学 産婦人科 助教

### はじめに

産婦人科分野における漢方医療の領域は広範である。産婦人科医は、思春期から始まる月経不順・月経過多に加え、性成熟期の不妊症、妊娠、そして更年期障害、さらには婦人科腫瘍と多岐にわたり、日常診療の中で漢方薬を処方している。今回は、高齢者の不安障害及びがんへの治療において漢方薬が著効した症例について報告する。

### 症 例

#### 【症例1】 77歳 女性

主 訴：不安、不眠、夜間過換気

現病歴：64歳の時、当科で子宮内膜増殖症及び卵巣腫瘍の診断で子宮全摘出術及び両側付属器摘出術を施行した。術後、イライラ、発汗、骨粗鬆症症状が出現し、更年期障害と診断した。加味逍遙散及び骨粗鬆症治療薬の服用にて症状は軽快していた。66歳の時、夫を亡くし、子供もなく独居生活となった。

75歳の時、老後の不安、物忘れがひどくなり、縁者からの指摘にイライラすることが多くなっていった。不眠傾向が強くなったため、精神科を受診し、睡眠導入剤及び抗不安薬を内服するも、夜間の不安が強く、過換気症状、パニック症状は改善しなかった。救急外来の受診や、救急搬送がなされることもあった。76歳の時、当科更年期外来を受診した。

現 症：腹力は弱く、裏熱虚証

経 過：抑肝散を処方した。内服開始数日後より、不安、不眠が解消され夜間の過換気発作も出現しなくなった。救急外来の受診もなく、現在は症状が軽快している。

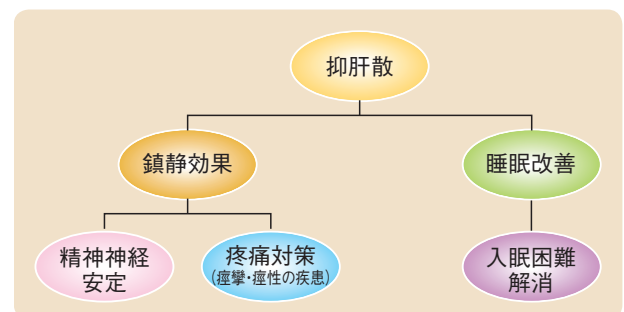
考 察：後山先生は、裏熱虚証の不定愁訴に対し、表の通りの方剤を提案されている。このうち、抑肝散(あるいは抑肝散加陳皮半夏)の作用に関して、演者は図1のように考えている。抑肝散は、貧血傾向で体力があまりない神経症、不眠症や小児の夜泣き等への効果が知られているが、最近では高齢者におけるアルツハイマー型認知症の予防や軽減、せん妄、

表 裏熱虚証の不定愁訴に対する漢方の使い分け

処方	目標症状	腹証	
加味逍遙散	イライラ 不眠	胸脇苦満	
抑肝散			小腹急結
抑肝散加陳皮半夏			腹皮拘急
柴胡加竜骨牡蛎湯	動悸 息切れ 不眠	胸脇苦満	
柴胡桂枝乾姜湯	抑うつ感 肩こり		
加味帰脾湯	精神不安	貧血	
甘麦大棗湯	不眠	あくび	
酸棗仁湯	不眠	臍上悸	

(後山尚久「女性診療科医のための漢方医学マニュアル」より一部抜粋)

図1 抑肝散の作用



不安などの治療への応用例が報告されている。病態の背景に「興奮しやすい」「怒りっぽい」「イライラ」などの心理面を持ち合わせる精神神経症患者に対し、親身な対話を重視しつつ抑肝散を併用する治療は、選択肢の一つとなりうる。

**【症例2】 74歳 女性**

**診断名：**子宮体がん

**現病歴：**X-6年、他医より紹介を受けて当院当科を受診した。子宮体がんと診断し、準広汎子宮全摘出術を施行した。術後検査ではIb期の診断で、経過観察とした。X-4年、右腸骨、肺及び左鼠径リンパ節への転移を認めたため、化学療法ならびに骨転移部位への放射線治療を施行した。部分寛解となり外来で経過観察とするも、X年夏、肺の転移部が増大し、再度化学療法を施行したが、骨髄抑制や副作用が強く、本人の希望もあり治療中止。同年秋、緩和ケアを目的として十全大補湯による漢方治療を取り入れた。

**経 過：**十全大補湯を処方したところ、内服半年後の画像所見で肺転移部の縮小を認めた(図2)。抗がん剤の投与を中止し、十全大補湯のみの治療に変更しても臨床症状に著変はなく、患者は5年後の現在も生存中である。

**考 察：**がん治療に対しては、西洋医学と東洋医学を上手に併用する治療法を見出す必要がある(図3)。東洋医学的には、がんの基本病態は気血水全

図2 十全大補湯内服開始前後のCT所見

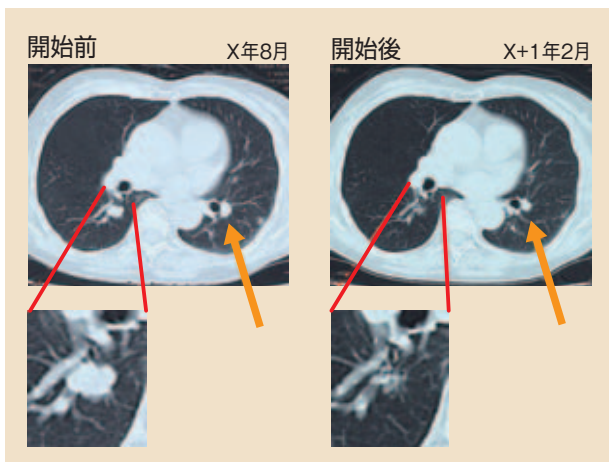
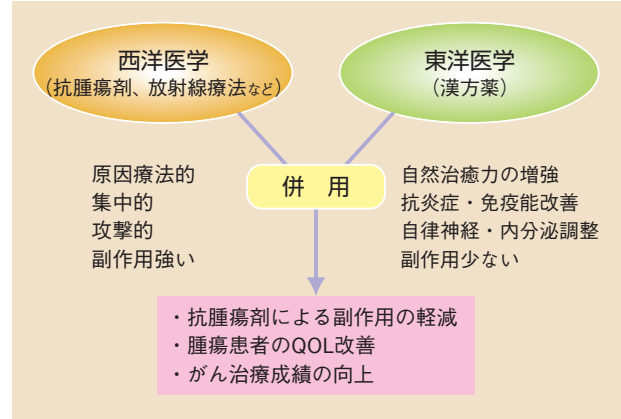


図3 がん治療に対する漢方薬の展望



ての異常である。特に、がんの進行に伴い出現する全身倦怠感や脱力感は、気虚、血虚の病態として補剤の適応となる。今後も十全大補湯は、がん治療に重要な役割を果たしていくものと考えている。

**まとめ**

現代のストレス社会を背景として、産婦人科においても漢方薬の使用機会がますます増えている現実がある。また、東洋医学的治療には、ターミナルケアも含む全人的医療に大きく寄与する可能性がある。西洋薬との併用を図りつつ、漢方薬の使用を拡大していきたい。

**Comments**

**後山：**2例ともすぐれた治療例ですが、特に症例2は見事な著効例ですね。峯先生いかがでしょうか。

**峯：**十全大補湯は化学療法による骨髄機能の抑制、免疫機能の低下を補って、がんの周辺症状を改善させ、時に腫瘍の縮小効果をみる症例が報告されています。今回の症例は5年という長い期間、腫瘍の縮小とQOLの改善がみられており、がんと共存できています。素晴らしい報告だと思います。

**後山：**引き続きこのような実践を積み重ねていただきたいと思います。